

後藤家の伝統的画題(金無垢獅子)

での光乗、栄乗の作風

―時代の影響が、個性が―

伊藤 三平

桃山美術における狩野永徳と後藤徳乗の作風における共通性(「刀和」406号、2024/9)と、寛永美術における狩野探幽と後藤程乗の作風の共通性(「刀和」407号、2024/11)について小論を発表した。絵画と彫金という芸術の分野は違っても、各時代における需要家の嗜好に合ったものを供給していけば作風に共通の要素は顕れていることを理解した。

では後藤家の伝統的な画題(獅子金無垢目貫)においては、時代の風潮・嗜好は顕れるのだろうか、それとも伝統重視なのか、あるいはそこに各代当主の個性が窺えるのであろうか。今回は、こんな問題意識で検討したが、検討の対象とした所蔵品は光乗(三匹獅子子)、栄乗(二匹獅子子)の金無垢目貫だけであり、普遍性のある論になっていないことをお断りしておきたい。

1. 比較する作品―

後藤四代光乗「三匹獅子」と六代栄乗「二匹獅子」

後藤家の上代の作品は無銘である。無銘の作品を光乗、栄乗と極めて比較・考察することが妥当かという問題は存在する。

今回、対象とする光乗の三匹獅子は日本美術刀剣保存協会が重要刀装具と指定したものである。裏は陰陽根であり、この造り込みからも光乗以前の作品と想定できる。

栄乗の二匹獅子は、折紙等で栄乗と極められて各種図版に所載されている他の作品と比較して確信し、ある目利きの方も賛意を示されているものである。造り込みの特徴として地金が薄手であることが特記され、これは栄乗の特徴とされている。それぞれの造り込みの特色を述べたので、2つの作品の裏を並べた写真を掲示しておく。光乗の陰陽根、栄乗の地金の薄さを理解していただきたい。



光乗「三匹獅子」金無垢目貫(表)



光乗「三匹獅子」金無垢目貫(裏)



栄乗「二匹獅子」金無垢目貫(表)



栄乗「二匹獅子」金無垢目貫(裏)



上段 光乗の裏(陰陽根)

下段 栄乗の裏(地金の薄さ、裏仕立ての巧みさ)

2. 信長に仕えた四代光乗作品の覇気

後藤家四代光乗は享祿2（1529）年、元和6（1620）年の生涯で92歳と長命だが、活躍時代は戦国時代を統一しつつあった織田信長の時代である。安土城太守の最上層階の金具を作製したと『信長公記』にも記されている。本能寺で信長が倒れた天正10（1582）年時点で54歳である。この時点で嫡男五代徳乗は33歳である。豊臣秀吉が奥州も平定して名実ともに天下統一を成し遂げた天正19（1591）年で63歳であり、光乗は天下統一過程の武將の元で活躍した金工である。

揭示写真は裏目貫の中央と右下の獅子だが、覇気横溢している。この二頭に限らず、それぞれの獅子が役割を持って戦いに行かんとするようで、私は「国盗り」と称している。



3. 慶長時代に活躍した六代栄乗作品の快活さ

六代栄乗は五代徳乗の嫡男として、天正5（1577）年、元和3（1617）年の41年の生涯である。父とともに豊臣家に重用された金工である。慶長5（1600）年の関ヶ原の戦い時点で24歳であり、豊臣家が滅亡した慶長20（1615）年の大坂夏の陣時点で39歳である。主家滅亡に伴い、当然に不遇となるが、家康に仕えていた叔父長乗の取りなしで元和2（1616）年の40歳時に二代將軍徳川秀忠から旧領を安堵されるが、



翌年に逝去する。活躍時期は慶長年間である。

こちらの写真も裏目貫の一部を拡大したもののだが、獅子の顔貌と姿態からは快活さを感じる。明るく、仲の良い二匹である。

4. 六代栄乗の活躍した慶長時代とは

光乗の作品からは時代にふさわしい覇気を感じるが、栄乗の作品から感じる快活さは何から来ているのだろうか。栄乗41年の生涯における働き盛りの19〜39歳は慶長年間であり、この時代を詳しく見てみたい。

① 慶長元（1596）年に先立つ天正17（1589）年に豊臣秀吉は聚楽第にて諸大名三百名に金銀二万六千枚を配っている。『太閤さま軍記のうち』（太田牛一著）に「太閤秀吉公御出世より此かた、日本国々に金銀、山野にわきいで」と書かれている通りである。

② この多量の金銀産出は慶長時代にも続き、世界の銀生産の1/3を占めて西洋にも知られた石見銀山も徳川領となつて大久保長安が山師安原伝兵衛を登用して更に産出量を増していた。慶長6年には佐渡金山の採掘も始まっている。

③ 文祿から慶長への改元は大地震が契機である。慶長年間は大地震が多く、文祿5年、慶長元年に伏見城が倒壊した慶長伏見地震、慶長伊予地震、慶長豊後地震があり、慶長地震（慶長9年に関東〜九州の太平洋沿岸に津波）、会津地震（慶長16年会津地方）、慶長三陸地震（慶長16年三陸沿岸に津波）なども発生している。

④ 三浦浄心の『慶長見聞集』の巻之一に「扱も扱も目出度御時代かな、我如きの土民^{まて}も安楽にさかえ、美々敷こと共を見聞く事の有難さよ、今が弥勒^{みろく}の世なるべしといふ」の一節が、時代の一面を表現している。

⑤ 刀剣界では、この時代を境に古刀と新刀に分類するが、作風の変化が顕著になり、特に「慶長新刀」と称される南北朝時代の大太刀を磨上げた姿で、鋭出来^{にえ}の豪壮な刃紋の相州伝が流行する。

⑥ 慶長3年の秀吉逝去後に第二次朝鮮の役に出兵した諸將が引き上げてく

る。この時に武断派諸将は文治派とも言うべき石田三成などと対立し、慶長5年に関ヶ原の戦いが起こる。豊臣家内部の戦いに位置づけられ、勝利した東軍諸将（徳川方＝武断派）に没収した西軍諸将の領地と、秀頼公からの恩賞として、豊臣家の約220万石直轄領（蔵入地）が分与される。この結果、豊臣家の直轄領は約65万石となるが、豊臣家の直臣領は山城、近江、備中にまで散在しており、一大名になったわけではない。

⑦ 慶長8年に家康は征夷大將軍に任じられるが、秀頼は内大臣に任じられ、朝廷は翌年から慶長19年まで、勅使以下が年賀の礼を述べる大坂に下向している。諸大名も同様である。慶長16年に二条城で家康と秀頼は会見するが、初めは家康が秀頼を立てて迎え、その後秀頼が遠慮して家康に上座を譲っている。同年8月の「和蘭東印度商会史」には「秀頼様は18ばかりの年齢であり、事情があつて皇帝の位に就くことができない。しかし大いなる歳入を有し、蓄積する財もきわめて多い。また有力な大名や平民の間では、秀頼様を心服する者も多いので、現在はずぐに判断することはできないが、いつかは彼が皇帝の地位に就く望みもある」と記している。歴史家笠谷和比古氏はこの時代を二重公儀体制と称している。

⑧ 秀頼は莫大な財産から、戦乱で荒廃していた百ヶ所以上の寺社に寄進を行い、伽藍や社殿の再興を図る。秀吉の追善供養の方広寺の大仏・大仏殿は知られているが、他に東寺、延暦寺、三十三間堂、南禅寺、鞍馬寺、善光寺、金峯山寺、醍醐寺などや、神社では石清水八幡宮、北野天満宮、住吉大社、熱田神宮、出雲大社などである。家康が豊臣家の財を散じるように仕向けたとの説もあるが、国家の安穩を祈願する寺社の保護は天下人に課せられた責務として遂行したとも考えられる。

⑨ 関ヶ原の戦い後から元和（1615）年に一国一城令が出されるまでの慶長年間に、日本各地に近世城郭が200前後も築城される。「城郭建設ラッシュ」と小見出しをつける歴史書も存在する。戦国時代の兵卒が、これらの膨大な建築需要を賄う作業員として吸収されたと考えられる。また各藩の財政もそれなり豊かであったと判断される。同時に城下町という消費が主体の人口集積地が各地に誕生したわけである。

⑩ 戦国の遺風の気性が荒い・殺伐とした気風が蔓延する中で、派手な身な

りをして、異風を好み、常識を逸脱した行動（辻斬りなど）に走る「傾きもの」が京都や江戸などで横行する。上層の武士にも広まり、大坂夏の陣で活躍した水野勝成（後に備後福山藩10万石）もその一人である。仲間同士の結束と信義を重んじ、命を惜しまない気概を生き方の美学とした。慶長17年に、その巨魁大鳥逸平が捕縛・斬首されたが、取調の拷問にも仲間の名は言わなかったと伝わる。

⑪ 出雲の阿国が京都で慶長8年に「かぶき踊り」をはじめめる。伏見城や宮中でも演じられ大いに流行する。慶長12年には江戸城でも演じたと伝わるように上層階級にも受け入れていた。

⑫ 上層階級に主として広まっていた茶道では古田織部（大坂夏の陣後に自死）の茶である。「破調の美」「剽ける」という趣向や華やかさ、個性ある道具が使われていた。

⑬ 豊臣家と徳川家の間での戦いが起こりそうだと各藩も想定しており、武備の備えは充実させていた。また藩によっては二代目藩主と古参の宿老との軋轢も生まれていた。

おわりに ― 時代の空気に加えて、栄乗の個性 ―

後藤家の金無垢目貫の需要家は当然に上層武士である。以上のような時代背景を考えると、主家の豊臣家が他家への贈答品として栄乗の作品を贈り渡るようなことは無いし、大名・高級武士も積極的に求めたと思われる。栄乗の作品から感じる快活さ、澁刺感は慶長時代の黄金文化に伴う「明るさ」も一因と考えられる。また二匹が仲良く見えるのは、「傾きもの」が重視した仲間意識の風潮なのだろうか。

江戸時代の刀装具の書「装剣奇賞」（稻葉通龍著）では栄乗の作風を「少しぼつとり」と称している。「ぼつとり」を広辞苑でひくと「女のふつくらとして愛敬のあるさま。また、ういういしく愛敬のあるさま」とある。すなわち、栄乗彫物の基調にある「ういういしく愛敬のある」作風＝個性も相俟って、このような快活で澁刺とした獅子を生みだしているのではなからうか。